

かり。)

十五日朝五時頃ともなれば、またまた子供らは隊を組み「せいともつけてけいらっしえ、〇〇〇〇(他部落名)もつけたぞ、おらほはおそいぞ」と、声高らかに朝の静けさを破りながら部落内をあるきまわる。

そこで青年たちは、浜に出かけて「さいと」に点火する。またまた子供達は、燃え終らないうちに、「ぢんちとばんばともち焼きこうらっしえ」と、どなりあるく。

すっかり燃え終ると若者は火のあと始末、子供たちは、宿と呼ぶ家(年々適當の家に依頼する)に集り、各児持参の茶碗箸などで朝食を共にして解散する。これで四日以来の「さいと」行事も終了するわけである。

長沢の「せーとっこ」

赤 橋 尙 太 郎

横須賀市長沢(ながそ)の左義長について同所の高橋宇之助氏(明治四十二年生)からきいたから記しておく。これは大正八、九年頃のことではやっていない。この行事を「せーとっこ」といい、松飾などを燃すことは「せーともし」という。

「せーとっこ」は子供の行事で部落毎に一グループがあり、その組織は六年生が「こがしら」、五年生が「ちうがしら」、四年生と三年生を「いも」と呼ぶ。尋常三年生になると「いも」の仲間入をする。その時仲間入のために十銭だす。十二月二十五日頃になると「やど」を作る。「やど」は毎年きまって「せーとかみ」付近の家の物を借りるのである。寝とまり出来るようにわらを敷きむしろをのべる。各自夜具を持ってくる。この日から全員がやどにとまることになるのである。食事は各人が家へ帰ってすませてくる。その日から中がしらがいもをつれて行き笹刈をしたり、くずかきをしたりして、それを「どうろくじいさん」(せーとかみのところにある丸石、ごろいしとも呼ぶ)の付近につみ上げる。これは「どんどんやき」をくむ時の中に入るのである。すすはきが終ると各家をまわってすすはきの竹を集めて来てこれもつみ上げる。これで十二月の行事は終る。正月四日になると中がしらがいもを使って各家を歩き「おかざり」をさげたのを車で集め、「せーとかみ」のところにつみ上げる。この時小がしらが各家へ入りこんで「つきのかずをいわってくれ」と云って金をもらう。一軒で二十銭か三十銭はくれたという。嫁をもらった家とか子供が生れた家からは特に多くいわってもらう。五十銭位くれた。子供が男児だった家では特にふんばつしてもらって一円くらいもらった。ところが銭をくれない家がある。すると「ごろいし」(せーとかみのところに置かれている丸石)を手拭にくるんで持ってゆき、家の中には

うりこんで「やめ！やめ！」（疾め）とどなる。又病人のある家からたのまれると「へいそく」を持って全員で出かけおはらいをする（四、五、六日の間にやる）。六日になると大人（世話をする者がきまっている）をたのんで「せーと」をくむ。この時村の家から「ごしんぼく」（心にたてる木）と「はねだけ」（もうそう竹の大きいもの）を寄付してもらう。「せーと」をくむとき今まで集めて「せーとかみ」のところに積み上げてあったおかざり、すす竹、笹、木の葉などをその中に入れるのである。くみ終るとごろいしをその周にならべる。七日朝は早く起きる。小がしらは「こーりとり」と称して裸になって海にとびこむ。上ってくるると小がしらが先に立ち他の者がこれに続き、村の家を起しにゆく。「せーと」すからおきらっせ、じんじもばんばもおきらっせ」とどなる。廻り終ると小がしらは湯に入る。この日のため「すいふろ」を借りておき、湯をおかしておく。湯に入り終ると着かえて「せーと」のところに行き、神酒を「せーと」の前三カ所にそそぎ、中かしら以上は一口ずつのむ。見に来ている者にものもんでもらう。「さんまた」（おかざりの一種）の一本をほぐして小がしらが火をつけ、「せーと」に燃しつける。「せーと」は燃え上る。「ごしんぼく」が浜へ倒れるとその年は魚がとれる。岡へ倒れると米がとれると信じられている。「ごしんぼく」が倒れると皆で燃えかすをむしりとりって持ち帰り門口にさしておく。盗難よけになると信じられている。「せーと」の燃え残りを集めて「てっき」（金網の一種）で餅をやいて持って帰り、家中で食う。悪い風邪をひかないと信ぜられている。「せーともし」がすむと灰も何もそのままにしてやどへ帰る。小がしらが菓子を買って皆にくばり、残金を分配する。この配分は小がしらがあらかたとしてしまう。中かしらはその半分位、四年生のいもは入会金の二倍位、三年生のいもは入会金位しかもらえない。やどを掃除して解散となる。（古くはせーともしをしているとき全員で「こーりとり」と称して海に入り、さんまたを手にもって火のまわりを走りながら地をたたいたというが、大正頃にはもうそれをやらなかったそうだ。）

和 田 の 「 さ い と 」

赤 橋 尙 太 郎

三浦市初声町和田の左義長について山田国蔵氏（明治十五年生）から明治二十三年頃のさいとの様子をきいた。和田では「世話やき」というのが二人あって色々の指図をする。他のものは同列でそれに従って行動をとった。尋常一年になると仲間に入る。世話やきは高等科（尋常科は四年まで）の者の中から選ばれた。正月四日一同集まっておかざりを集めにゆく。各家から銭や米をもらってくる。銭は二銭か、三銭だが多くは米をくれて銭をくれない。米ばかりで銭が集まらぬと米の一部を引とってもらい銭にしたという。五日には神社前の広場にさいとをくむ。中心に杭をうち、これに大竹をしばりつけて心にする。上の方には松を一本しばりつける。これを中心に竹や松で杉なりに作り上げる。「ごりょういし」と